

キーパーソン

Key Person

島基晴さん(41)。地元の業者との共同開発を通して商品づくりに取り組んでおり、食をテーマに異なる業種が手を取り合う新たなビジネスモデルとして注目されている。

(松尾俊二)

中島商店専務

中島 基晴さん(41)

保命酒使い 新商品次々

〈メモ〉福山市出身。慶応義塾大学商学部卒。伊藤忠商事に入り、東京本社で約3年間、砂糖やコーヒー豆を輸入してメーカーに御すた。その後、家業を継ぐために帰郷した。中島商店(中島良昭社長)は砂糖、水あめなどの食料品卸問屋。1909年創業の老舗(しにせ)で、資本金1千万円。従業員7人。

— 新たな商品開発に取り組んだきっかけは
— 保命酒を使ったのはなぜですか

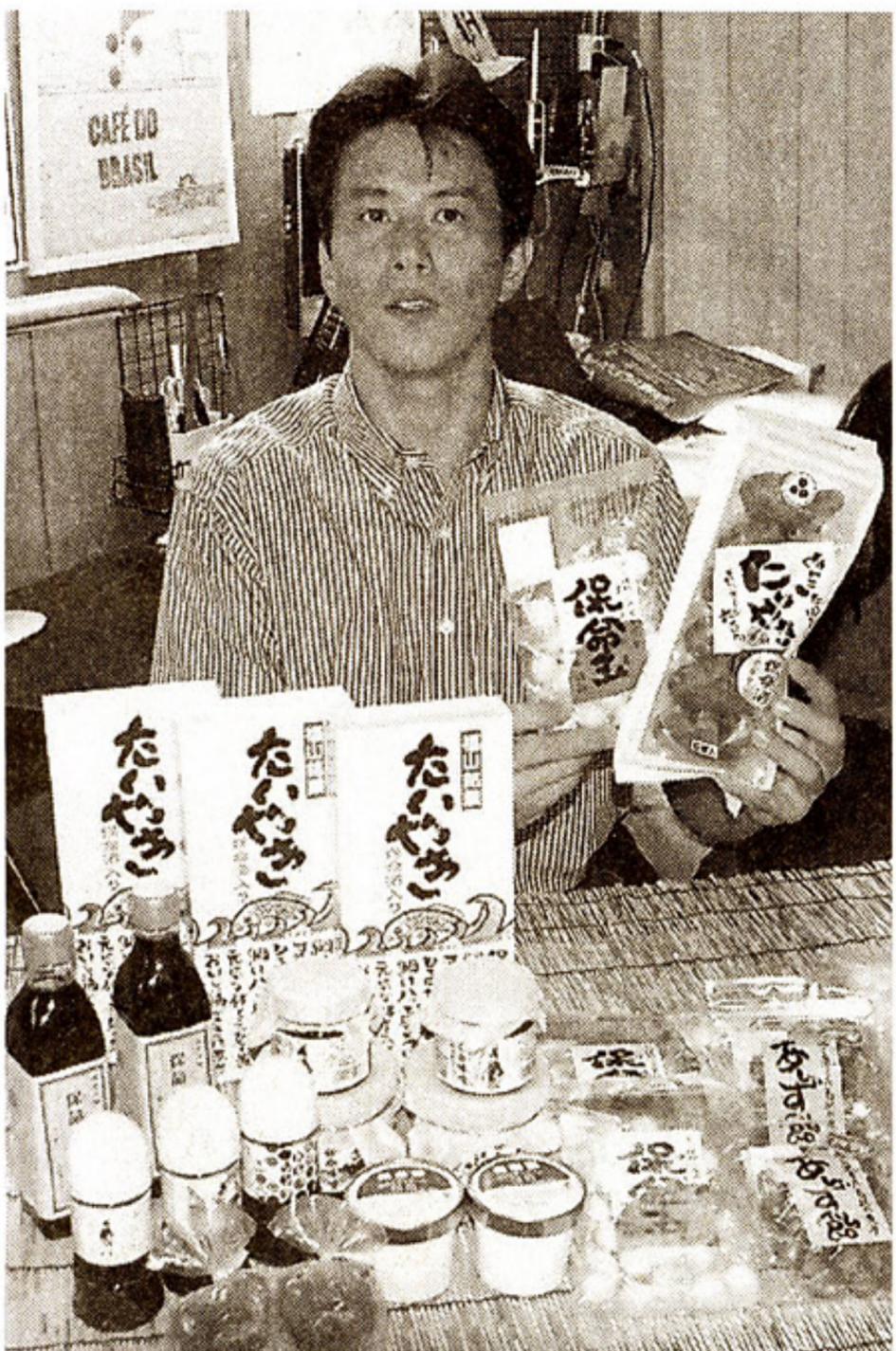
「新しい土産があれば」という

「最初はお菓子でした。家業で製菓の原材料を扱っているのだから、保命酒が菓子に使えるのではないかと見当は付けていた。洋菓子店などの協力を得て05年に酒粕のこうじの粒を混ぜたジェラートやアイスキャンデーをはじめ、ゼリー、ミニ鯛焼き、あめ玉の5品を開発した。」

「今後の目標は、備後地方には特産品が数多くある。生産者や様々な業種のメーカー、小売業者らが集まって新商品を開発するだけでなく、販売やPR活動なども含めたビジネスモデルを確立し、福山を中心とした備後地方の知名度アップや活性化に貢献したい。」

「その後、保命酒関連商品が相次いでいます。これまでに商品化したのは15種類、20品目。さまざまな切り口で応用の可能性が広がる保命酒の伝統の重みを感じた。食卓に近い場所にあるほど人の目にとまる機会も多いので、知名度アップのために調味料にも力を入れた。手軽

「備後地方には特産品が数多くある。生産者や様々な業種のメーカー、小売業者らが集まって新商品を開発するだけでなく、販売やPR活動なども含めたビジネスモデルを確立し、福山を中心とした備後地方の知名度アップや活性化に貢献したい。」



江戸時代に「潮待ちの港」として栄えた福山市鞆町。この町特産の保命酒を使ったお菓子など、備後地方の味や素材を活用した商品を新たな土産物として全国に売り出す動きを展開しているのが、同市御船町1丁目の食料品卸問屋「中島商店」専務の中